約束を守つた補充例話を加へる方がよろしい。

八　補充資料

シンゲン　ト　ケンシン

タケダシンゲントウヘスギケンシントハ、川中島ヲアヒダニハサンデ、十一ネンモタタカヒマシタガ、ドウシテモ、ショウブガツキマセン。

アルトキハケンシンガ、モドカシクオモツテ、ヒトリウマニマタガリ、シンゲンノヂンヤニキリコミ、モスコシデシンゲンヲキリコロソウトシタコトモアリマシタ。ソレホドマデニシテモ、ショウブガツカナイノデ、アルトキリヤウハウカラ、力ノアルサムラヒヲ一人ヅツダシ、カツタハウガ、川中島ヲトルトイフヤクソクヲイタシマシタ。

サテソノ日ニナリマスト、川中島ヘマクヲハリ、タケノカキネヲツクツテ、シアヒノバショヲコシラヘマシタイコノアヒヅニリヤウハウカラ、力ノアルサムラヒガデテキテ、オタガヒニシアヒヲハジメマシタ。

タケダガタモ、ウヘスギガタモ、コノショウブ一ツデ川中島ヲトルカトラレルカナノデ、一シヤウケンメイ見ハツテヲリマス。ソノウチニタウトウウヘスギガタノハウノサムラヒガツヨカツタモノトミエテ、アヒテヲツキフセテシマヒマシタ。ウヘスギガタニハ、カチドキコエガドツトアガリマシタ。コレヲキイテタケダガタノ人人ハ、クヤシクオモヒ、ウヘスギガタノハウヘセメコマウトシマシタ。

シンゲンハコノトキ、オコツタミカタノ兵ヲナダメテ、「コレモシカタガナイ。一タンヤクソクシタコトハ、ケツシテチガヘテハナラヌ。ヤクソクヲヤブルコトハ、サムラヒノハヂトスルトコロダ。」

トイツテ、川中島ヲウヘスギガタノモノトイタシマシタ。

＝佐藤武氏著　趣味の修身讀本＝

第二十五　正　直

一　學習助成の着眼點

（1）目的　不正直の極めて鄙しむべき事を敎へて益々深く正直の心を養はせるのを本課の目的とす。

（2）着眼點　敬虔我そのまゝの生活が正直である。何等のまざりものゝない、純粹裸體の生活である。自然性にも巧利性にも墮せざる要求の表現である。最高の要求の表現それが正直である。之は自己に對しても他人に對しても、國家に對しても凡てに對して純粹敬虔我の生活をなす事である。だから自己が修養して、よき成長を爲す上にも、また人々と協同して文化の發展に參與するにしても正直の德がなくては不可能のものである。

けれ共、どうかすると眞に敬虔我の聲を聞かないで、淺薄に自然性の要求によつて或は他の强烈なる壓迫によつて、自己を欺き、他人を欺く場合がある。之は敬虔我の成長の足らない結果であると言はねばならぬ。

子供は往々にして不正直を敢てするものである。それにはいろ〳〵の原因がある。その中で父母敎

師などが作つた不正直性もある。昔から兒童は眞實性のものとされてゐる。大人から考へても子供には何とも思つてゐない。故にその實現に對する發表などは躊躇しない。然るに假りに所謂嚴格過ぎた父母教師があつて、大人に要求する樣なことを要求したとしたならば、子供は到底堪へられるものではない。其處で其の堪へ得ざる壓迫、拘束、苦痛を一時的遁れんとして其處に純粹なる發表々現をしなくなるものである。之等は父母教師の作つた不正直である。あまりに子供に理解のない家庭に育つた子供は、割合に不正直ものが多い。心すべき事である。

本資料に於ては、卷一に於て「うそをいふな」に於て、ありもしない事を事實らしく吹聽して自分が遂に滅亡した事によつて正直を會得せしめんとしたに反し、更に進んで、自己の過失を隱蔽しなかつた資料によつて、一般的に正直でなければならぬことを領解せしめんとするものである。猶本資料は卷一過をかくすなに連關してゐるものである。

二　聯關資料

卷一　一三　過をかくすな

一四　うそをいふな

一五　人の物

卷三　七　正直

卷三　二二　自分の物と人の物

三　學習助成の要綱

(1)　松平信綱の略傳

(2)　松平信綱の正直

1　朋友と戯れしこと。

2　屏風を破りしこと。

3　將軍に咎められしこと。

4　過を詫びしこと。

5　正直を賞められたこと。

(3)　正直の心得

2　行ひにかげひなたのないこと。

2　不確實な事を言はぬこと。

3　過を人に嫁さないこと。

4　格言について。

四　學習助成の計畫　凡二時間

第二十五　正　直

第一時　追經驗による領解――松平信綱の話
第二時　自己創造――正直の心得

五　準備　修身掛圖

六　學習助成の實際

第一時

(1) 學習動機の誘發

掛圖提出

1　子供が何人ゐるか。
2　大人は何人か。
3　何時頃の人か。今の人と何處が異るか。
4　刀を持つてゐる人は？　その後の人は。

(2) 學習案內

兒童と問答しつゝ當時の階級狀態について知らしめる。

(3) 領會會得

今日はこの子供の正直であつた話について學びませう。

1　松平信綱の略傳。

松平信綱は今から約三百年前の人で、大河內金兵衛久綱の息子で、幼名を長四郎と呼んだ。六歳の時、叔父にあたる松平右京太夫正綱の養子となり松平と名乘つたのである。後、將軍秀忠に召出されて、將軍となる家光が生れたので御小性役の列に加つた。それが九つの時であつた。時々石垣に上つたり女中をいぢめたりした事もある。しかし主君に對しては誠實溫順の人であつた。

後、成長して三十一歳で一萬石の領地を賜り後三萬石を賜つて老中となる。

後、九州島原の亂起つたとき後より行つて之を鎭めた人である。德川家光にとつてはなくてはならぬ人で、大層功勞のあつた人である。

＝できるだけ簡單に說く事がよい。之があまり複雜になつてはよろしくない。ただ、信綱の全人格の大要を紹介すればよい。

2　信綱朋友と戲れる。

信綱十四歳ばかりの事である。ある日信綱は、多くの年上の近侍の人々と戲れて、相撲をとつたり押し合が派積んだ。

3　屛風を破る。

その時表御殿の次の間に立てゝあつた屏風を破つた。それは秀忠將軍が尤も大切にしてゐた屏風であつた。

一同は心配した。昔は悪い事ができると切腹するのであつた。之は大變な事ができたと心配したが、今更何とも仕方がない。一同色青ざめふるひ上つてしまつた。銘々勝手に他人になすりつけて、自分はしないと高言してゐた。

4　將軍之を咎める。

一同如何にせうかと、たゞ顔見合せてゐる時、そこへ將軍秀忠が表御殿へお越しにならうとして家來をつれて茲をお通りになつた。

秀忠公は、大事の屏風が破れて居るのを御覽になり、すぐ、其處に居る三人の者に向つて、

「たれが此の樣な事をいたしたのか」

と、お咎めになつた。近侍のものは、みなブル〳〵とふるひだした。

「私は一向知りません」

と言ひたいものもおつたが、その聲さへ出て來ないので、みなさしうつむいて默してゐた。

5　信綱過を詫びしこと。

信綱は、すこしも憶する色がない。ジツト秀忠將軍の仰せられる事を聞いてゐたが、靜かに進み出て、

「私が破りました。御友達と茲で戯れてゐました。その派積みに私が破つたのであります。どうか御免し下さい」

と伏した。

6　正直を賞められた。

秀忠は、この樣子をジツト見てゐたが、その潔白な有樣に感心して、

「よくも、其方は、何の包むこともなく正直に申した、凡て物事はかくす事はよくない。正直な事を褒めてつかはす。けれども之から後はこの樣な過はしない樣氣をつけておれ」

と言つた。猶言葉をついで、

「他の年上のものが默つてゐてはよくない。この樣な事は年上のものが申すことじや」

と言つて表御殿の方へ御通りになつた。

一同のものは秀忠將軍が如何にお怒りになつて、どんなお仕置になるか知れないとビク〳〵してゐたのによつて信綱の正直なる言葉によつて御免しを受けたことを喜んだ。

(4)　内面深化

1　信綱に見習ふべき點?。

2　もし此際みんなが默つてゐたらどうなるか。
3　信綱はから言へばゆるしてくれるであらうと思つて言つたのか。
4　免してくれない事が分つてゐたらどうするだらうか。

(5)　自己内省

1　不正直を言つたことはないか。
2　正直であつたと思ふことあるか。
3　果して過をしたとき恐れないであらうか。
4　恐れて隱したり又は其場をつくらう様な事ができるであらうか。
5　若し誰れも知らぬとしたらどうか。
6　隱しおうせる事ができるものか。
7　何處までも隱くせるものと極まつて居ればどうか。
8　自分を欺くことができるかどうか。
9　正直は一生の寶とは何か。

＝寶とは巧利的の解釋はよくない。「體得すべきもの」「身につけ離すべからざるもの」と解するがよい＝

第二時

(1)　教科書の思索

1　各自に默讀せしむ。
2　二三名に讀ましむ。
3　教科書の深化。

イ、屋敷とは何か。はうばいとは何か。
ロ、屏風を破つたのは何歳の頃か。
ハ、何故屋敷にゐたのか。
ニ、如何にして破りしか。
ホ、誰れの大切な屏風か。
ヘ、斷りすれば免してくれるとの考から？。
ト、他の者はどうしてゐたのか。
チ、正直なのを賞めたゞけか。
リ、賞められたら又するのか。

(2)　正直にする心得

1　行にかげひなたなきこと。

先生の前では悪い行をしないが先生のゐない處では一生懸命に悪い事をする。先生の前ではよい事をするが先生がゐなければ善い事をしない。家の人がをるとをらぬと、人がをるとをらぬによつて、その行に裏表がある。それはいけない。不正直である。時、處、人の有無に拘らず言行に表裏のない事でなければならぬ。

2　不確實な事を言はぬこと。

不確實な事を言ふ事は、その動機に於ては、さほど不純なものではない。けれども、結果に於ては、人を誤らしめる事が尠くない。結局事實に於ては不正直を言つた事となる。譬えば不確實な算術の解答を與へて之を對者が信じたならば、その人は甚しき迷惑を蒙る。

故になるつたけ不正確な事は言はぬがよろしい。若し是非言はなければならぬ場合は、「たしかではないが」と言つて一應斷つて免しを受けて置かなければならぬ。

3　過を人に嫁さないこと。

自分のした過を他人に持ちかけると言ふ事は甚しき心得ちがひである。知らぬときでも、自分が知らぬから他人であらうと思つてはならぬ。人の過ちはそれが自分に感づいてゐない場合がすくなくないのである。

又時には、之を調べるものが自分以外の人に嫌疑をかけると、それをよい事として自分悪を隱さうとする如き事は慎むべき事である。

すべて、その場のがれは永久の策ではなく、却つて罪を重くするに外ならぬのである。

※以上兒童の實際に就て、なるべく兒童自身の問題として考察創造發表せしめる。諒解のできてゐないで創造のできぬ處は教師が啓發して助成してやる※

3　格言の指導

正直は一生の寶

「正直は一生の寶」と言ふ事は寶とは、「大切なるもの。」と言ふ事であり、「一生」とは「生れて死ぬまで。」と言ふ事であるから、「正直は生れてから死ぬまで大切なものであるから、常に身につけ之を守り實行しなければならない。」と言ふ事である。

「正直をしてゐると寶が得られる」と指導するは眞を得たものではあるまい。

七　學習助成上の注意

(1)　信綱の正直なりし事を讃美して、之を追想追憶せしめねばならぬ。人物傳記の取扱だから特に此點に留意して取扱つて行かねばならぬ。それと同時に、他の朋輩の行爲にも着眼せしめねばならない。

(2)　信綱は、だまつて自己を救はうと努力した他のものよりは、巧利的に言へば或は、自己を亡

ぼすものであつたかも知れない。けれ共正直の德が因を爲して、却つて明かに自己が救はれたのである。さうしなければゐられない信綱の告白は眞に貴いものである。かう言つたら免して呉れるであらうと思つて告白して、重き處置をされたら非常に苦痛であらう。しかし信綱は重き處置は覺悟して自己の全部をさらけ出さゞるを得ない心持は大に吾人の學ぶべき點である事を力說したい。

(3) 正直なものは、人から信用受けて、世の中に於ての活動が誠に圓滑に表現される。不正直なものは之と反對である。けれども、人の信用を得んがために正直にすると言ふ樣では、何等他人からの信用を受ける事にはなりはしない。正直は目的である。手段ではない。飽くまで、さうしなければならない程度に望んで置きたい。

(4) 人は常に自己の最高要求に從つて之を實現することが肝要である。それは敬虔我そのまゝの生活である。人は常にその聲をきゝつゝ行動せなければならない事を了解させる。

八　補充資料

1　正直な子供

島崎藤村

ある かたゐなか に、人 の よい いんきょ が すんで 居りました。ジャック と いふ 名前 で した。其の となり の 家 の 人 が、にはとり を 買つて くれ と いふ もの ですから、ジャック は「よしよし」と いつて 買ひ取りました。

あくる日 の こと、にはとり は たまご を うみたくなつた ので、もと の ふるす へ かへつて うみました。

となり の むす子 に、今年 八つ に なる フイリップ と いふ 子ども が 居りました。ちやうど 其の 時、たつた ひとり で 家 に 居りました。

すると、昨日 となり へ 賣つた はず の にはとり が、自分 の 家 の 鳥小屋 の 方 で、しきりに 鳴き立てる もの ですから、どう した こと か と かけて 行つて 見ました。

見る と、す の 中 に うみ立て の たまご を のこして、にはとり が とび出した 所でした。

「やあ、僕 の すき な 新しい たまご。お母さん も よろこばう、家 の にはとり が かへつて 來て」

と フイリップ は ひとりごと を いつて 居ました が、又 かんがへて、

「まて よ、あの たまご は うち の か しら。にはとり が もう おとなり の なら、たまご も やつぱり おとなり の もの に ちがひない。さう だ、學校 の 先生 が、ひと の もの は かへさなければ いけない」と おつしやつたつけ。早く おとなり へ 行つて かへして 來よう。お母さんたちが 居なくて も いいや。行かう、行かう」

と 思ひなほしました。フイリップ は かけ出す が 早い か、おとなり の 家 の 戸 を たたきました。そして 家 へ 入りかけて いふ には、

「ほら、をぢさん、あなた の とこ の にはとり が、うち の 小屋 へ 來て たまご を うみました から、僕 が 今 持つて 來たん です」

「へえ、だれ が お前さん を おつかひ に よこした の」

と　となり　の　たぢさん　が　たづねました。

「だあれ　も」

「なに、だれ　も　いひつけない　のに、お前さん　が　ひとり　で　此の　たまご　を　持つて　來た　の　かい」

「さう　です。うち　には　今　お父さん　も　お母さん　も　居ない　の　です。僕　は　おかへししなければ　いけない　と　思つたから、持つて　來たん　です。僕　は、あなた　の　所　の　物　なん　か　取つて　おく　こと　は　出來ません」

と、此の　正直　な　フイリップ　が　答へました　と　か。

＝趣味課外讀本＝

小山内　薫

2　正直もの

或る日、一匹の兎が狼の家の前を駈けて通りました。すると、狼が「こら。うさ公。一寸待て」と呼び留めました。けれども、兎は構はずに、猶も早く駈け出しました。

そこで、狼が大層怒つて、その後を追つかけました。

兎は直ぐに狼に捕へられてしまひました。

「おい。うさ公。お前は俺が留れと言つた時に、なぜ留らなかつたのだ」かう狼が聞きますと、兎は震へながら答へました。

「少し急いだものですから」けれども、狼は聞きませんでした。

「お前は俺の言ふ事を聞かなかつたから、その罰に殺してやる。併し今日は俺も俺のお上さんも、御飯を食べたばかりでお腹が一ぱいだし、それに餌食もまだ五日分位はあるから、それの無くなるまで、お前はそこの藪の下で待つてゐるのだ。その時になれば勘辨してやるかも知れないよ」

狼はこう言つて笑ひました。

兎は藪の下に坐つて、ぢつとしてゐました。少しでも動くと狼の目がギラ〳〵と光るからです。兎はぶる〳〵震へながら、殺される日を待つてゐました。

この兎は或る家のお嬢さんをお嫁に貰ふ筈になつてゐました。その日も、そのお嬢さんの所へ行かうと思つて道を急いでゐるところを、狼に捕へられたのです。

兎はお嬢さんの事を考へてはひとりでしく〳〵泣いて居ました。

その内に或晩、兎が眠くなつて、少しとろ〳〵して居ますと、お嫁さんの兄さんが目の前に立つて居ました。

「おい〳〵お前のお嫁さんは死にかゝつてゐるよ」

お嫁さんの兄さんがいきなりかう言ひました。

「あの子はお前が狼に捕へられたと言ふ話を聞いて、あんまりびつくりしたので病氣になつてしまつたのだよ。あの子はかう言つてゐるよ。死ぬ前に一度お前に會つて左樣ならがしたいつて」

兎はびつくりしましたが、狼が恐いので、どうすることも出來ません。

そこで、涙をこぼしながら、默つてぢつと堪えてゐますと、お嫁さんの兄さんがこう言ひました。

「二人で一緒に逃げようぢやないか」

さう聞くと兎は俄に逃げる氣になりました。

そこで、體を縮めて、足を揃へて、耳を背中へぴつたりと附けて、今にも藪を飛び出しさうになりましたが、ひよいと狼の巣の方を見ますと、急に足が屈んでしまひました。

「あたし狼の許しがなければ、ここを出ることが出來ないのです」

兎は顫へながらかう言ひました。

すると、さつきからこの樣子を見てゐた狼がいきなり呶鳴りました。

「貴樣たちは何をそこで話してゐるのだ」

兎は二匹とも石のやうになつてしまひました。

狼の夫婦は牙を鳴らしながら、二人の前へ出て來ました。

四つの恐しい目が、暗闇でランプの樣に光りました。

「狼さん。何でもありません。近所の方が唯あたしを訪ねて來たのです」兎がぶる〳〵顫へながら、かう言ひますと、狼は鼻でフンと笑ひました。

「何でもないと。嘘を言へ。俺は何にもかも聞いてゐたのだぞ」狼がかう言ひますと、兎のお嫁さんの兄さんが口を出しました。

「實はかうなのでございます。この人の嫁で、あたしの妹になる兎が、今死にかけてゐるのでございます。それで、左樣ならをして來て貰ひたいと頼んでゐるところなのでございます。

すると狼のお上さんがかう言ひました。

「ふむ。それはお嫁さんが可哀さうだ。どうだね。内のお父さん。ちよいと左樣ならをしにやつてやらうか」

狼の亭主は困つたやうな顏をして、「でも明後日食べる筈になつてゐたのだかなら」。と言ひました。

兎は急いでかう言ひました。

「狼さん。あたしはきつと又歸つてまゐります。あたしは自動車のやうに、急いで行つてまゐります。神樣に誓つて、きつとまた歸つてまゐります」

すると、狼のお上さんが、亭主に向つてまたかう言ひました。

「まあ、御覽よ。可愛さうぢやないか。あんなにお嫁さんに會いたがつてゐるのだもの」

そこで狼の亭主も兎を歸してやる氣になりました。

その代り、兎は約束をした時間までにきつと歸つて來なければなりませんでした。

おまけに、お嫁さんの兄さんを、人質に――ではない、兎質に置いて行かなければなりませんでした。

「あさつての朝六時までに歸つて來ないと、お前の代りに、お前の嫁の兄さんを食べてしまふぞ。だが、その時になれば、勘辨してやるかも知れないよ」かう言つて、狼は又笑ひました。

兎は鐵砲の玉のやうに駈け出しました。

山があれば、いきなりそれを飛び越しました。

川があれば、直ぐ飛び込んで、泳いで渡りました。

急いで行つて御婚禮をすませて、かならず狼の朝御飯に間に合ふやうに歸つて來よう、兎はさう思ひながら道を急ぎました。やつとの事で兎はお嫁さんの所へ着きました。

お嫁さんはお婚さんの顏を一目見ますと、病氣も忘れて寢床から這出しました。

お嫁さんのお母さんは氣違のやうに喜びました。やがて伯母さんだの、從弟だの、近所の者だのが、方々おかお祝ひに集まつて來ました。けれども、お婚さん一人はみんなのやうにはしやぎませんでした。お婚さんは嫁さんにいきなりかう言ひました。

「早く着物をお着かへなさい。そして直ぐに御婚禮をしませう」

すると、お母さんの兎が不思議さうな顏をして、

「どうして、そんなに急ぐのです」と言ひました。

するとお婚さんの兎が答へました。

「あたしはすぐ歸らなければならないのです。狼はたつた一日暇をくれたのですから」お婿さんの兎は、みんなに今までのことをすつかり話しました。

そして話しながら涙をこぼしました。そして、かう言ひました。

「歸るのは辛うございますが、一度約束をした事は守らなければなりません。それが兎の國の規則ですから」

すると、伯母さんたちや從弟たちも贊成しました。

「さうとも、さうとも、一度約束をした事は守らなければならない。昔から今までに嘘をついた兎は一匹もゐなかつたのだから」と言ひました。

そこで朝お嫁さんの所へ來た兎は、もう夕方にはお嫁さんと別れなければなりませんでした。

兎はお嫁さんに向つて、かう言ひました。

「あたしはきつと狼に食べられてしまふでせう。どうかあたしのことをいつまでも覺えてゐて下さい」斯う言ふかと思ふと、急に狼のことを思ひ出して、「けれど、狼は、ことによると、勘辨してくれるかも知れません」斯う言つて、飛んで行つてしまひました。

ところが、兎がお嫁さんのところへ行つて居る間に途中の國には、急に色々な惡いことが起りました。或所では雨がひどく降つて、ついきのふ兎が平氣で越した川が溢れて、十里四方がすつかり水浸しになつてしまひました。

他の所では、王樣と王樣とが戰爭を始めて、丁度兎の通る道がその戰場になつてしまつてゐました。

また他の所では、コレラがはやつて、百里四方は往き來がならぬといふお觸れが出てゐました。

しかも、その上に、どこへ行つてもいろんな他の狼や虎や梟なぞが、自分を待ち伏せしてゐるやうに見えました。兎はびつくりしましたが、どうにもしやうがありませんでした。

洪水の中や、戰爭の中や、コレラのはやつてゐる中を、まつしぐらに駈けました。兎は石で足を切られたり、棘のある枝で横つ腹を刺されたりして、血みどろになつて道を急ぎました。けれども　行さのやうには中々道が捗どりません。

夜中まで休みなしに駈けましたが、まだ中々先が遠いやうです。でも、自分のお嫁さんの兄さんが質に取られてゐる事を思ひますと、悲んだり涙をこぼしたりしてゐる暇はありません。

一分も早く行つて、お嫁さんの兄さんを助けなければならないと唯そればかりを考へてゐるのでした。やがて夜が明け始めました。

梟や蝙蝠はどこかへ隱れてしまひました。空氣が冷くなつて急にあたりが寂として來ました。

それでも兎はやつぱり、遲れてはならないぞ、遲れてはならないぞと心の中で思ひながら、同じやうに、どんく駈けて行きました。

間もなく、東の空が赤くなりました。鳥が目を覺しました。蟻や毛蟲が動き出しました。けれども、兎にはなんにも見えませんでした。なんにも聞えませんでした。唯、「遲くてはならないぞ。遲くてはならないぞ」と思ひながら、駈けてゐました。すると、しまひに、とう〳〵狼の家の手前の小山が見える所まで來ました。

兎は體中の力を出して、小山のてつぺんまで飛び上りました。

もうそれからは、一足も前へ進む事が出來なくなりました。

兎はもう死にさうになりました。

狼の家は地圖のやうに小さく、自分の足下に見えてゐました。それでゐて兎はそこへ行くことが出來ないのです。どこか遠くのお寺で六時の鐘が鳴りました。

すると狼は穴を出て伸びをして嬉しさうに尻尾を振りました。

それから質にとつた兎の所へ行つてそれを前足で抑へつけると、いきなり爪を立てゝ二つに裂かうとしました

すると、小山の上で死にかゝつてゐた兎が、千匹の兎が一度に叫ぶやうな聲を出して、

「ここにゐます。あたしはこゝにゐます」

と、どなりました。さうして小山から沼地へ轉るやうにして飛び降りました。

狼はその兎を大層讃めました。そして、兎を二人とも許してくれました。

＝修身例話＝

3　松平信綱

徳川三代將軍家光公の時代に松平伊豆守信綱と云ふ人がありました。此の人は非常に智惠の勝れた人でありましたので、世に智惠伊豆とまで稱へられた程であります。

其信綱の子供の頃には家光公も竹千代君と申されましたが、信綱は竹千代君時代より仕へて樣々なる相手をしてなりました。

ところが或日、竹千代君が、御殿の屋根に雀の巣をしてあるのを見て、ほしくなりましたので信綱に「あれを捕つてこい」と申されました。然し其の御殿は竹千代君の父、二代將軍秀忠公の御居間でありますから迂濶にそんな屋根に上るのを見つけられては御咎めを受けねばなりません。さればと云ふて竹千代君の言ひ附けを背くことが出來かねましたので「畏こまりました。併し晝の間は屋根に上ることは出來ませず、又上つた所で雀は居りますまいから、今晩必らず捕つて差上ませう」とお受けを致しましたが、其晩信綱は仕方がございませんからそつと屋根に上つて晝間見定めておいた雀の巣を探らうと致しました途端思はず足を踏すべらして、庭先にどつと落ちました。

折柄秀忠公にはお寢みになつてをられましたが、其物音に驚かれ宿直の家來と共に縁側に出られて「誰れぢや」と云ひながら手燭の影から御覽になると、信綱は小さくなつて蹲踞づてをりますので「今時分何んな用あつてそこに居るか」とお尋ねになられました。

其時信綱は竹千代君のことを少しも口には出さず、只「御殿の屋根の雀がほしさに斯樣な始末でございます」と云ひました。之れは若し竹千代君の名を云へば竹千代君にまでお叱りを蒙らせては相濟まぬと考へたからであります。

秀忠公も心の内では粗ぼ夫れと察せられましたので「いやお前がほしいのではあるまい。誰れかに頼まれたのであらう、夫れを云へばお前の罪を許してやるぞ」と申されましたが信綱は「いゝえ誰れにも頼まれは致しません、只だ私がほしかつたからであります」と何處までも突つ張りました。秀忠公は心の中で「左樣までもして竹千代君を庇護つてくれるか、之れでこそ後には竹千代君の爲めに忠義な家來になるだらう」と感心をしながら尙一層信綱を試そうと思はれて「さうではあるまい、竹千代君に頼まれたのであらう。それならば夫れと云へ、云はねばお前を此の袋の中に入れて白狀をするまで出さぬぞ」と大きな袋を持ち出されました。

けれども信綱は少しも恐れた體も無く「全く私がほしかつたからであります。竹千代君には少しも御存じの無いことです」と强情を張りましたのでトウ〳〵其袋の中に入れて天井に吊られました。そして其翌る日、又もや秀忠公は「何うじや信綱苦しふ無いか、苦しければ早く白狀をせい」と袋の外から申されましても信綱は相變らず「私が惡ふございました」とばかりで何事も申しませなんだ。

處が竹千代君の母君は其事を聞かれまして、秀忠公の居られぬ間を見計つて、そつと袋を下して食物を與へて切前の通り吊してをきましたので信綱は窮窟はありましてもお腹の飢くようなことはありませなんだ。

斯くして三日餘りも袋に入れられたまま居りましたが、少しも白狀を致しませなんだので、秀忠公もトウ〳〵根氣負けをして「之れから決して左樣のことをしてはならぬぞ、竹千代君の爲めによく仕へよ」と申されただけ

で許されました。そして信綱の父君をそつとお呼び出しになつて「信綱は感心な者ぢや、いつまでも今の心で居る様に育てよ」と仰せられましたさうであります。

第二十六　恩を忘れるな

一　學習助成の着眼點

（1）目的　人から受けた恩は、永く忘れない様にすべき事を教へるのを本課の目的とする。

（2）着眼點

敬虔我の生活は、感恩の生活であると言つてよい。

敬虔我の成長は社會の中に於てのみなされる。團體としての生活の中に於てのみ成長する。

さう考へるとき、それだけでも、團體のあり難さを感ずる。

それが、種々の境遇に分つて考へる所にその境遇境遇に應じて恩を感ずる。

家庭と言ふ團體の中に於て恩を感ずる。學校と言ふ中に於て恩を感ずる。近所と言ふ中に於て隣人朋友の恩を感じ、一般社會の中に於て他人の恩を感じ更に進みて、天地萬物の恩を感ずる。

けれども、人は、空氣の中に包容されてその恩を知らない。

知つてゐても忘れ易いのが常である。すべての人、すべての物に恩を感じたとしても、どうかするとその感じた恩を、いつの間にか忘れ易いものである。

故に、先づ第一に恩を強く感ずると言ふ事が大切である。強く感ずるならばそれだけ忘れる事も尠い譯であるが、更に一層忘れない樣に努力する事である。前者は感恩であり、後者は知恩である。感恩知恩は、單に受身的に恩を感じたり、恩を忘れずに知つてゐるだけではない。積極的に報いたいと言ふ動機が起り之を實現する。

之が報恩である。

本資料に於ては兒童の好愛する犬が主人の恩を死ぬまで忘れなかつたと言ふ美談によつて、感激發奮し自己創造を行はしめんとするものである。

「犬でさへ。」との感激發奮は直に起る。更に進んで、お鶴の恩を忘れなかつた資料により、之を自己の生活に接近活躍せしめんとするものである。

人より受けてゐる恩の大なる事を反省せしめ、報恩の道として、第一に恩を知るべきことを說き、次に恩を報ずる點に及び、以て社會生活に於ける德の根本を領會せしめんとするものである。

二　聯關資料

卷一　二　天長節
卷一　三　先生
卷一　四　友だち
卷一　一六　近所の人
卷一　二三　おとうさん・おかあさん
卷一　二六　忠義

三　學習助成の要綱

(1)　ハチの恩を忘れざりしこと
1　ハチが可愛がられて育ちしこと。
2　身體極めて健康となりしこと。
3　送り迎へをなせしこと。
4　飼主の死後之を繼續せしこと。
5　銅像を建設して顯彰されしこと。

(2)　鶴子の恩を忘れざりしこと
1　隣村の祭に行つたこと。
2　お祭の樣子。
3　母を見失ひしこと。
4　老人に助けられしこと。

第二十六　恩を忘れるな

5　母子の感謝。
6　翌日禮に行きしこと。
7　其後禮を怠らぬこと。
（3）恩を忘れない心得

四　學習助成の計畫　凡三時間

第一時　ハチの恩を忘れざりしこと
第二時　鶴子の恩を忘れざりしこと
第三時　恩を忘れない心得

五　準備　新修身掛圖、前修身掛圖

六　學習助成の實際

（1）學習動機の誘發
1　皆さんが、今日まで、成長して來たのは、たれのお蔭ですか。
2　いろ〳〵文字を知り計算を知り、智慧が增して來たのは誰れのお蔭ですか。
3　父母、先生の外に恩を受けてゐると思ふ人々をあげよ。
友達の恩について
近所の人の恩について
社會の人々の恩について
國、君の恩について
‖現に學習したる事項を中心として　恩を受けてゐる點を明にする‖
4　受けたる恩はどうしなければならぬか。
‖恩を感ずる‖
‖恩を忘れない‖
‖機會毎に報ひる‖

（2）今日はハチと言ふ犬が、いつ迄も飼主の恩を忘れなかつたお話を學びませう。

（3）領解會得
‖本教材は事實話として揭げておくが、實際は偶話として取扱ふべきであるから、教師用書の說話と照合して、事實の穿鑿に陷つて、教訓の本旨をそらす事のない樣指導すべきである‖
1　ハチ公の生れた處。
八公は、大正十二年十一月十五日秋田縣大館町の昔庄屋をしてゐた內に生れたのでした。
そして、八公は、全くの日本犬でした。日本犬は何れも耳がピンと立つて尾をきりつと卷いてゐる。全身淡茶色の堂々たる體格の犬です。ハチが路傍に佇んでゐると學校の生徒はみんな、「ハチ」

「ハチ」と言つては、其の頭を撫でて通つて行きます。それは、ハチが性質極めて溫順で殊に恩を忘れないりつぱな評判の犬だからである。

2　上野博士に引取らる。

八公は、生れて四十五日目貰はれて、生れ故郷から遠い〳〵東京の帝國大學農學部の上野博士先生の處へ引きとられる事になつた。

途中は汽車旅行で、一人ぼつちで二日かゝつた。

3　その家の子の様にして可愛がられた。

八公が上野先生の家へついたのは、今から(昭和十年)十一年前の大正十三年の一月十日でした。上野先生は、農學博士でとくに犬がおすきでした。八公が行つた時には、洋犬ジョンとSの二匹飼はれてゐた。

〃以下博士が八公を可愛がられた例をあげておく、適宜斟酌されたい。單にかわいがられたでは兒童は諒解できない。〃

(一)　八公が行く前に飼はれてゐた日本犬が病氣になつたときなど、博士の寢室で藁蒲團の上にねかせ、フランネルを背につけ、毛布にくるんで、それから吸入をかけて、一週間は夜一度もねむらずに看病された相である。

(二)　八公は特に先生のお氣に入りでした。お歸りになると抱つこして連れて行つて、いつもの通りお居間のお火鉢のそばにすはらせられるのでした。

(三)　少し遠方へ散歩するときは洋犬と共に、書生の才ちやんが連れて行くのでした。才ちやんは八公の毎日することを日記に書いておく。博士は、お歸になつて之をご覽になるのを樂とせられたのである。

(四)　其の頃どうした譯か八公は胃や腸が弱いです。それで初の内は、時々おなかをこはしたり、下痢をしたり、熱を出したり、風をひいたりしていつも病氣ばかりしてゐる。獸醫も「とても滿足に育つまい。」と言はれた程であつた。飼主はそれをあはれんで、一入ハチをかはいがり、ハチが病氣になるたびに、醫者よ藥よと心配しふだんも自分の部屋に置いて大切にした。腹かけをしてゐることが度々でした。

あるとき、風をひいたら、毎晩徹夜して、氷枕や氷袋で頭をひやし、吸入やら湯たんぽやらそれは大變な手當でした。

(五)　又博士が御入浴のとき、「ハチー　もう、おなかもよくなつただらう！」とおつしやつて、腹かけをはづされ、

「さあ一緒にお風呂には入らうー」

と子供に話でもするように申され、お湯を入れた大きな洗面器にハチを入れ暖たまつた後ハチの身體一面石鹸をつけて、ブラシでよく洗つてやるのでした。

(六)　二ヶ月位は博士と共に毎晩休んだのでした。朝は「ハチー　目がさめたかね」

と言つて

「ドレ〳〵お顔を洗ひにつれて行つて上げよう」

と抱つこして洗面場へ行くのが例でした。

(七)　博士が、農商務省の用事で朝鮮行がきまつた時には、八公にいろ〳〵と御馳走をたべさして、

「あすから、しばらく朝鮮に行くのだから、げんきでゐなさいよ」

とおつしやる。

(八)　博士は年に二度葉山へ避暑と避寒に行かれる。出發するときは八公に

「お前を連れて行きたいが、さうすればジョンもSもつれて行かねばならぬから大へんだ。がまんしておるすばんをなさい。よいか。わかつたかね。」

「ハチお前は、東京で始めての夏だから暑さに負けない様に元氣を出してゐなさい」

と我子に言ふ様にお話しになる。

そのお蔭で半年ばかりたつてからと言ふものは、ハチは以前と見違へる様に健康になり、それからずん〳〵成長して見事な體格の犬となつた。

(九)　ハチは隨分毛深いので蚤には大變困るのである。之を察して博士は朝と晩と二度毎日ハチの蚤をとつてやるのが例であつて之を一日缺かされた事がない。

(一〇)　ハチもだん〳〵大きくなつた。東京に來てから一年目に

「ハチ！　おまへが來て、ちようど一年目だね！　去年も寒かつたが今年も相變らず寒い、しかし却々大きくなつた。來た時は隨分身體が弱かつたがもう大丈夫だ。」

と言つてカンカンにのせ

「おや〳〵十貫もあるじやないか。」

と喜ばれる。

竹櫛で全身をかきつけ其あとにブラシをかけ

「暖かくなつたらお風呂に入れてやるのだが、今は寒くてしかたない。春になるまで此の竹櫛でがまんしてゐなさい」

と可愛がられる。

4　八公のお見送りお迎へ。

(一)　博士のお宅から數丁はなれた所に帝國大學農學部がある。ハチとジョンは、いつも御主人のお伴をして農大にゆく、そして校門のそばで、いつも同じ樣に、

「ハチや、おかへり」

「ジョンや、おかへり」

とやさしく、おつしやつて頭から頸のあたりまで撫でられる。

いつの間にかお迎へも覺へて。午後三時頃になると又おむかへに校門まで出かけて、博士のすがたを見るといきなりとびついて肩から胸にかけて泥だらけにしてしまふ。

＝その年の秋は非常に大きくなつて十貫あまりになつてゐた＝

それでも博士は平氣でニコ〳〵してゐられる。

見送り出迎へは雨が降つてもかゝした事がない。何か外の譯でハチが校門に出迎へしてゐないと博士は、がつかり力を落してしまはれて、

「ハア、今日はハチ公忘れたな」

と言はれ、若しや病氣ではないかと大急ぎでお歸りになつて、八公の事をお尋ねになると言ふ位である。

(二)　朝、學校へお送りしたときは、學校へお迎ひに行くのであるが、農事試驗場や(省線)農商務省(市電)の用のときに朝市電でお送りすると、午後三時頃には共處でお迎へする。澁谷驛でお送りしたときは、午後三時頃驛へお迎へするのが例である。澤山な人が出ても博士が見えにならぬと大抵三十分乃至一時間位は、驛前の停留所と省線の出口とをあちらこちらにかけつこして出口で待つのであつた。

5　博士の死と！　！三日絶食！　！シヤツ！　！通夜！

(一)　博士は大正十四年五月十一日農科大學に於て急逝せられた。

朝學校までお見送りした八公は又お迎ひに行つたが出て來られないので仕方なし夕方歸つて來て家で博士の歸おりを待つた。

いくらたつてもお歸りにならない。翌日あちらこちらと探してゐる內、物置に博士の着られてゐたシヤツと蒲團を嗅ぎ出して三日三晩何も食べずにそのシヤツを抱いて離れなかつた。

三日目には御飯をいつもの半分位食べて、澁谷驛までお迎へに行つた。二三時間經つても博士が歸られぬので夕方內に歸つた。

(二)　その晩とう〳〵博士の柩を嗅ぎ出して座敷にとび上り、大勢のものが止めるのもきかずに柩の四つ足の下にもぐり込み一同のものと御通夜をした。

五日目は告別式で仕方なしに外に出されたのであつた。

(三)　それから後ハチ公は毎日〳〵午後が來ると澁谷驛まで博士をお迎ひに行くのであつた。行く時は元氣にとんでゆくが二時間たつても三時間たつても博士が見えないとションボリ歸つて來るのであつた。

6　預けられる。

その樣に毎日悲しさうに空しく歸つて來るハチが氣の毒でたまらない。いつそ別の人に飼つて貰つたならば、元の飼主の事も忘れるであらうと、

博士死後家は引越す事となり、ハチ公はジョンと共に、日本橋大傳馬町堀越といふ呉服問屋に預けられた。

その後、淺草三筋町高橋子之吉さんのお家に預けられた。

その頃十二貫もあつたが、ヤツパリ毎月の始めにセメンエンの虫下しをのます。又牛の肝も飲ますと言つた樣に持病の胃腸があるので此處へ來ても隨分お世話をかけた。

この二年間は紐でつながれてゐたから澁谷驛へ行きたくても行かれなかつた。けれども、元の主人の事は忘れないで、折角の心遣も全く無駄であつた。

次に博士の宅へ出入をしてゐた小林さんの內へ預けられることとなつた。

茲では、博士の形見として大切にして下さるので八公も大變喜んだ。而して小林さんの內は、代々木富ケ谷だから澁谷驛まで十二三丁であるからすぐ行かれる。

7　七年間のお迎へ。

小林の內へ來てから毎朝毎晩澁谷驛に通つた。

「今日はきつと御歸りになるにちがいない。」

「昨日は駄目だが今日こそお歸りになるだらう」

そればかり樂しみに、毎日改札口で入る人、出る人の顏ばかり眺めるのであつた。そうして、十年もたつたがまだ昔の主人の事を忘れずに探してゐる、年とつたハチの姿が驛の前に見られた。

それで凡ての人に知れ渡つた。

「これがハチだね、可愛相に御主人のなくなつたのもしらないで。」

「感心だネ。七年間も毎日御主人を迎へに來るなんて全く感心だよ。」

と噂が高くなる。

同情の深い人は毎日ポケツトにビスケツトを入れてハチに惠んでやる方もある。

驛長は顏馴染となつて、いつも大事にしてくれる。病氣で困つて居ると、醫者を雇つてくれる。

日本中の日本犬の展覽會を開いた時、八十一頭集まつたが、この時八公はお客分として招かれた

9　彫刻となつた八公。

八年の秋の帝展には彫刻部の審査員である安藤照先生が彫刻されてお出しになられた。

10　銅像が立つ。

日本全國の小學生の基金と一般の人との寄附でいよ〳〵澁谷驛頭に「忠犬ハチ公」としての銅像が建つて、昭和九年四月二十一日除幕式が行はれ、永久に宮城前の楠公、萬世橋前の廣瀨中佐の銅像と共に偉大なる教訓を殘すこととなつた。

第二時

(1)　前時の經驗再現

1　ハチのお話をしてごらん。

2　ハチに感激した點は何處ですか。

3　自分はハチと比べてどうですか。

(2)　學習案内

ハチの樣な犬でさへ恩を忘れなかつたのです。萬物の一ばん上と言はれる人間が恩を忘れる樣ではよくない。今日は、鶴子さんと言ふ二年の子が受けた恩をいつ迄も忘れなかつたよい行についてで學びませう。

(3)　領解會得

1　隣村の祭に行つたこと。

鶴子は六つのとき、お母さんと一しよに隣村のお祭りに行つた。

このお祭りは、其の附近では一番大きなお祭りで、其村ばかりでなく近郷から集まつて來る人の數は實におびたゞしいもので、何萬人と言ふ人出である。從つて神輿や段鶴、ヨヤショ、見世物その他いろ〳〵た道具を賣る店、たべものを賣る店、など境内を埋めてしまふのである。丁度此の邊りの〇〇神社の祭禮の樣です。

鶴子も茲へ當日參拜に行くことを唯一の樂しみとして待つてゐた。その日は幸ひに天氣もよかつたので朝から用意をしてお正午すぎからお母さんに手を引かれて行つた。道々大勢の人々と道づれとなつた。

2　お祭りの樣子。

十町程手前から宮太鼓の音がドン〳〵と聞こえて來る。四五町になると、人の騷ぐ聲がワイ〳〵と賑やかにきこえる。お宮の森の木の間がくれに何千本といふ幟が見える。鶴子は喜び勇んで、母の手を引張つて「早く行かう」とせき立てる。

境内へはいれば又一しほの賑かさで、然かも人と人とのせり合ひで押すな〳〵の大騒ぎである。二人は人を押分けて進んだ。見世物の唄ふ聲、鳴り物の聲。活動寫眞の樂隊の音客を呼ぶ聲。玩具屋菓子屋などの賣り聲など騒々し。漸く人の間をくゞりぬけて神前へ額づき拜禮した。

3　母を見失ひしこと。

それから右に折れて小高い處から境内全體を見晴して暫く休憩した。それから其處を下りて活動寫眞の前に行つた。二人はその看板を見てゐた。

そこへ神輿がワツショ〳〵の掛聲勇しく急に廻り角から出て來た。其處らあたりに看板を見てゐた何百人と言ふ人たちは、怪我しては大變と命から〴〵蜘蛛の子を散らす如くに散り〳〵と別れてしまつた。

此時鶴子の握つてゐた手が離れて鶴子と母親とは別々に群衆のなだれの中へ押し込まれてしまつた。やつと騒ぎが靜まつた頃には、母親と鶴子は丸で遠方の方へ置かれてあつた。

4　老人に助けられる。

さあ大變です。鶴子は人ごみの中から上へ向いて大人の顏を見たが知らぬ人ばかりです。

鶴子さんの顏は眞青になつて涙ぐんで來た。けれ共、割合に元氣な子だから泣き出しもしない。

之からお母さんを尋ねようとあちらこちら歩き出した。何樣廣い境内に何萬人とも知れない程の人込みだから、わかる筈がない。一時間あまりも探したけれ共甲斐目知れない。いくら元氣な鶴子さんでももう疲れてしまつて、とう〳〵泣き出した。

お母さんだつて心配して、どうせどこかで泣いてゐるだらうと思つて泣き聲のする方をあちらこちらと探し廻つた。けれどもどうしても見付からない。

鶴子が泣いてゐる時、一人の老人がどうして泣いてゐるのかと聞かれた。鶴子さんは元氣ですから、すぐ泣くのを止めて、お母さんに別れてしまつた事を話した。それは何處であつたかも尋ねられた。寫眞館の前であつた事を話した。

それではと言ふのでそこを尋ねた。

5　母子の感謝。

母親も鶴子も其處を何度か尋ねたが、いつも二人が入れ違ひであつたので出逢はずにゐた。老人は鶴子を慰めて、

「心配しないでもよろしい。必ず私が探してあげるから。」

と言つて活動寫眞館の前の方へと探して行つた。丁度母親も又、其處へ探しに來てゐた。

鶴子は之を見つけて、

「お母さん！」と大きな聲で叫んだ。老人はどこにゐるかと尋ねて、急いでお母さんの方へ連れ

て行つた。大勢の中ですから鶴子の聲も聞こえなかつたと見えて、前へ〳〵と歩んでゆく。二人は一生懸命に人を押し分けて行つた。

お母さんに追ひついて、お母さんにしらした。お母さんは鶴子の居つた事に氣付いて駈けつけて抱きしめた。

鶴子は老人に御世話になつた事を話した。お母さんは、

「マアいろ〳〵と御世話になりました。探して下さらなかつたら、また出逢ふ事ができなかつたのでした。どうもありがたうございます。」

と繰り返して御禮をいつた。老人は鶴子の頭をなでゝ、

「マア迷子にならないでお幸福でしたネ。」

と言つてニコ〳〵しながら立ち去つた。

6　翌日御禮に行つたこと。

鶴子とお母さんとは、翌日老人の家を訪ねて御禮に行つた。菓子折箱を御禮の印として差上げた老人もいろ〳〵と斷りを言つたけれ共、折角持つて行つたので納めて貰つた。老人もマア早く見付かつたからよかつたと言つて、いろ〳〵話し合つた。

7　鶴子が恩を忘れなかつた。

鶴子が學校へ通ふ樣になつた。それからは、その老人が田圃へ行つたり、歸つたりするのと、途中でよく出逢ふ事となつた。鶴子は、老人に世話になつた恩を何時までも忘れない。道であふと恩を受けた事を思ひ出して丁寧に挨拶をするのを常として、いまだ一度も忘れた事がありません老人も近所の人々に話して、鶴子さんはホントに賢しい子だ。一度世話してあげたら、いつ道で逢つてもニコ〳〵として挨拶するのですと言つて賞めてゐた。

(4)　內面深化

イ、どんな賑やかさであつたか。

ロ、如何にして母にはぐれたのか。

ハ、その結果どうしたか。

ニ、老人は如何にして尋ねたか。

ホ、翌日どうしたか。

ヘ、それから後はどうしたか。

ト、何故でしよう。

チ、忠犬ハチと比較せよ。

第三時

第二十六　恩を忘るな

（1）前時の經驗再現
（2）教科書の思索
（3）内省深化

1　人に世話になつたら、どうせなければならないか。
2　恩を感じたゞけでよいか。
3　恩を忘れないだけでよいか。
4　恩を報じるにはどんな方法があるか。
5　鶴子は誰から恩を受けたのか。ハチは誰から恩を受けたのか。
6　その他にどんな恩を受けてゐるか。
7　受けた恩はどうせなければならぬか。
8　自分が今迄受けてゐる恩をあげよ。
9　之を報じてゐる手段をあげよ。

（4）自己創造

1　將來今迄以外にどんな恩を受けるであらうか。
2　今迄受けてゐる恩を如何にして返すか。

‖各自の考を述べしめる‖

3　恩を受けても忘れてしまふ樣な人はどうだ。
4　爺さんは恩を返して貰ふつもりで探し廻つたのか。
5　それは何處で分るか。
6　恩を施してはどうするのがよい。

七　學習助成上の注意

（1）恩にはなれ易いものです。故に彼等に内省せしめて、各種の人々から各種の恩を受けてゐる事を偲ばしめて、深くその恩に感銘する樣に領會せしめねばならぬ。

（2）本資料によつて「犬でさへ」と言ふ點に深く感激せしめて發奮を促すことに努め自己内省を深めしめなければならぬ。

（3）補充資料は、見知らぬ人より受けた恩を永久に忘れない事である。それを思ふ時に、自分も亦、見知らぬ他人のためにも出來るだけ世話を燒いて上げる事が人間の道であとる言ふことも暗々の内に領會せしめねばならぬ。

（4）恩は之を感じても忘れ易いものであり、又覺えてゐても報恩の誠を致すことは容易でない。それに反して施した恩は割合忘れ難く、ある程度まで恩返しを要求したがるものである。

故に之が日常の一般注意としては受けたる恩は忘るべからずとし、施したる恩は忘れざるべからずと言ふ事に努力せなければならぬことを領會せしめたい。

八　補充資料

1　獵師にかみついた蟻

春風が靜かに吹きそめると櫻の花が笑い出しました、昨日の大雨にひきかえて、今日は日本晴。あまり氣持がよいので鳩が櫻の花を尋ねて枝から枝へとんでいました。

「助けて下さい。〳〵。」

この聲に鳩は驚きました。誰れが何處で苦んでいるのかと氣をつけて見まわりました。

つい下を見ると昨日の雨に水溜ができてゐる。その中へ一匹の蟻が落ち込んで出る事ができないのでもがいてゐます。之を見た鳩は心配して「早く助けてやりたいものだ。溺れ死んでは可愛相なものじや」とすぐに櫻の葉を一枚くわえて飛んで降り、水溜りの中へ入れてやりました。

蟻はよろこんで、その葉の上へ這い上りました。その時西風がふいて、蟻をのせた大船は東の港へ着きました。それでヤット蟻は陸へ這い上がる事ができました。見ると鳩がそこにいるので、さては自分の危い處を救うてくれたのは、この鳩だと思いましたから、すぐに側に行って頭を下げその禮を言いました。

「お蔭で助かりました。私も今大きないなどをくわえて、あとずさりして引張っている内に、つい落ち込みましたのです。若し鳩さんが居てくれなかつたら、私はもう死んでしまつていたのです。鳩さんは私の命の親です。一生この御恩は決して忘れはいたしません。キットその萬分の一でもお返しいたします。ありがとうございました。」

と禮を言つて鳩に別れて歸りました。

十日程經つてから、鳩があちらこちらと餌を探していました。この日獵師は、何か獲物がないかと、朝から山を西東とかけまわりましたが、大層しあわせが惡い日であつたか、まだ一羽も見付かりません。丁度山の端へ來た時に一羽の鳩を見付けました。鳩はそれとも知らずに四方を眺めて居ました。獵師は之ばしたりと引金に手をかけてねらいを定めました。

此時蟻はその附近で餌を探して居りました。此樣子を見つけて、「之は大變だ。」「御恩返しをするのは今この時だ。」と驅けよりまして、其人の脚にひどく咬み付きました。獵師は吃驚して、獵銃を取落しました。その時ズドンと鳴りました。鳩はびつくりして音のした方を見ますと獵師が獵銃を投げ出して立つて居ます。鳩は不思議でたまらないけれど、うかうかすると危險であると思つて飛び去りました。

獵師は「しまつた。今日は日が惡い。」とあきらめて歸りました。

鳩はどうも不思議でたまらず暫く經つてから元の木の枝へ來て見ると、蟻が下に居りますので、さては此蟻が助けて下さつたのだと、すぐ飛び下りて「蟻さん有りがとう、お蔭で私も生命が助かりました。もし蟻さんが助けて下さらなかつたら私は死んでしまうのでした。」と禮をのべました。蟻も御恩返しが出來たと喜びました。

＝安部清見氏著　大正イソップ＝

2　鼠の恩返し

ある暖い日に、獅子があまり疲れたので、岩の蔭で好い氣持ちになつて晝寢をしていました。

其處へ一匹の鼠がやつて來ました。鼠は岩だと思つてツイ寢むつている獅子の頭の上を通り越そうとしました。

獅子はそれに氣付いて眼をさましました。折角よい氣持にねている頭の上をフミあらされたので大腹腹を立てて「コリヤ」と大聲をあげて鼠をつかみました。そして一息に殺してしまおうとしかけました。鼠はビックリして「獅子さん、どうかお助け下さい。私はツイ知らずにあなたの頭の上を通りましたのです。どうも惡うございました。助けて下さつた御恩は決して忘れはいたしません。どうぞ命ばかりはお助け下さいませ。」と頼みました。獅子は「アノ小さい奴が何で恩返しができるものか」と思いましたが、獅子は氣が荒いながらも優しい處がありますので、「知らずにした事なら免してやらう」と思つて、

「それでは　今日の輕るがるしい行は免してやらう。二度とするな。よく注意しておれ。」

と言つて放してやりました。モ少しで殺されようとした鼠は大喜びで、丁寧に御辭儀をして、

「有りがとうございました。キット氣をつけます。此御恩は忘れません。」

と言つて別れました。

その後、何年か經ちました。或日獅子は餌を探して歩るきました。その内に獵師がかけてあつた網の中へ這入つてしまいました。之はシマツたと色々と工夫しましたが、どうしても道れでる道がありません、今に獵師が來たら殺されてしまうであらうと思うと悲しくて〳〵て、大聲をあげて泣いていました。

この日鼠もこの邊へ餌を探しに來ていました。獅子の吼える聲をききつけまして、之はキット前に命を助けて貰つた獅子の聲にちがいがないと思つて、早速その場へかけつけて行きました。

見ると、大恩ある獅子が獵師の網にかゝつていますので驚きまして、

「之は獅子さんですか。前には大事の命をお助け下さいまして有りがとう存じました。お蔭で今日迄元氣に生きて居りました。只今あなたの聲にちがいないと思つてかけつけて來ました。見れば誠にお氣の毒な事であります御心配なさいますな。私が今にのがれ出る樣にいたしますから。」

と言うと、獅子は涙を流して、

「どうぞお願いたします。早くどうぞ。」

と、さすがの獸の王と言われる獅子でも、今日ばかりはしよげ返っています。

鼠は、早速小刀の樣な、ハサミの樣な齒で、その網をゴヂ〳〵と切り始めました。見る間に大きな穴をあけました。

「サア獅子さん玆からお出なさい。獵師の來ない間に、サア早よう。」

と言うと獅子は喜んで這い出しました。しきりに頭をさげまして、

「誠にねづみさん有り難う存じました。之で命が助かりました。この御恩はキットお返しいたします。」と喜んで山の奥へ逃げて行きました。

■安部清見氏著　道のおはなし■

3　おんしらず　の　かりふど

一

や吉と　いふ　かりうどが　ありました。

ある　大雪の　ふつた日に　てつぽうを　かついで　山へ行きました。　どこで　どう　道を　まちがへたものか　どうしても　おうちへ　かへれなく　なつて　しまひました。

そのうちに　だん〳〵　おなかが　すいて　くるし、さむさは　ます〳〵　ほねみに　こたへて　くるので　さすがの　や吉も　なきだしさうに　なつて　ウロ〳〵して　ゐました。すると　とつぜん　足を　すべらせて　まつさかさまに　谷そこへ　おちこんで　しまひました。や吉は　それきり　氣が　とほくなつて　しまひました。

なんじかん　ぐらい　たつたでせう。や吉は　ふと　じぶんの　かほに　なまあたゝかい　いきが　かゝるや

うな　氣がしたので　眼をあけて　みると　おどろきました。一ぴきの　大きな　くま　が、じぶんの上へ　馬のりに　なつて　ハラ〳〵と　息を　ふきかけて　ゐるのでした。や吉は　あはてゝ　にげだそうと　しましたが　からだ中が　しびれたやうに　なつてゐて　どうしても　うごくことが　できません。

「しかたがない。こゝで　ころされて　しまふのだ。」

とおもつて　ぢいつと　眼を　つぶつて　ゐました。しかし　くま　は　いつかうに　や吉を　ころそうとしません。や吉は　また　おそる〳〵　眼を　あけて　みますと　じぶんの　今　ねてゐるところは　くま　の穴　らしく　おもはれました。くまは　や吉の　からだを　あたゝめる　つもりか　しきりに　ハア〳〵　息をふきかけて　ゐましたが、やがて　じぶんの　てのひら　を　や吉の　鼻さきにつきだして「なめてみろ」といふやうな　やうすを　しました。や吉は　かね〴〵　くまの　てのひら　は　みつが　ついてゐて　あまい　といふことを　きいて　ゐましたので、ためしに　なめて　みますと、いゝ　にほひ　がして　おいしかつたので、ペロペロと　なめました。

すると　にはかに　からだ中に　力が　ついた　やうな　氣がしました。や吉は　そこで　はじめて、くまがじぶんを　ころそうと　したのでは　なく、じぶんを　たすけて　くれたのだ　と　いふことを　しりました。

くまは　それから　まいにち　てのひら　を　なめさせて　くれましたので、や吉は　だん〳〵　げんきをとりもどして　あるけるやうに　なりました。しかし　ほら穴の　外は　まいにち　雪が　ふりつもつたので、とても　おうちへは　かへれませんでした。

そのうちに　だん〳〵　ようき　が　あたゝかくなつて　雪が　とけだしました。春が　きたのです。や吉はもうすぐ　おうち　へ　かへれると　おもつて　よろこんで　ゐました。

ある日のこと　くま　は　や吉の　そでを　ひつぱつて　外へ　つれだそうと　した。

「おゝ　おまへが　うち　まで　あんない　してくれるのかい。それは〳〵　どうも……」

や吉は　よろこんで　くまの　あとから　ついて行きました。ずいぶん　ひどい山おくと　みえて　いくたびか　谷川を　わたり　もり　を　ぬけ　しながら　やつと　じぶんの村の　みえる　とうげ　まで　きました。そこまで　くると　くまは　たちとまつて「さやうなら」をするやうは　ふう　を　みせました。

や吉は　ぶじに　たすかつた　よろこびを　くまの　しんせつ　さに　心を　うたれて　眼に　一ぱい　なみだを　ためながら

「くまさん！　どうも　ありがたう！　この　ごおんは　しんでも　わすれないよ。」

と　くりかへし〳〵　おれいを　いひました。くまは　その　ことばが　わかつたのか　わからないのか、いつもと　おんなじやうな　かほをして　又　のそり〳〵と　山おくへ　かへつて　行きました。

その　うしろずがたを　見おくつた　や吉は、あの　しんせつな　くまに　なんとかして　ごおんがへしがしたいと　心のそこ　から　おもひました。

二

しかし　村へ　かへつた　や吉は　日がたつにつれて　だん〳〵　くまの　ことを　わすれて　しまひました。かうして　四五年の　月日が　すぎました。

ある時　この國の　とのさまが　や吉の　村の近くへ　かりに　おいてに　なりました。ところが　その日はどうしたものか　おひるすぎに　なつても　ろくな　えものが　とれませんでした。やうやく　二三びきの　うさぎと　小さな　きつね　とを　しとめた　ばかりでした。

とのさまは　ふきげんな　かほ　をして

「だれか　ゐのしゝ　か　へう　の　ゐるところを　しつてゐる者は　ないか。もし　をしへて　くれる者が

あつたら　たくさん　ほうびを　とらせる。」

と　おつしやいました。

それを　きいた　や吉の　心は　をどりました。

「よし　いつかの　くまの穴を　をしへて　しまはう。なアに　恩しらずだツて　なんだツて　かまふものか。そんなことを　いつていたら　一生　びんぼうで　くらさねば　ならぬ。」

よくに　眼のくれて　しまつた　や吉は、とのさまの　まへへ　でて　いひました。

「もうしあげます。わたくしは　すばらしい　大きな　くまの　ねるところを　ぞんじて　をります。これからどあんない　いたしませう。」

とのさまは　大よろこびで　けらいたちと　一しよに　あとについて　行きました。や吉は　四五年まへの　おもひでを　たどりながら　やうやく　くまの穴のまへまで　來ました。

けらいたちが　穴のまへで　松葉を　いぶしますと　やがて　穴の中から　すばらしく　大きな　くまが　出てきました。それは　たしかに　四五年まへの　しんせつな　くまに　ちがひ　ありません　でした。あの時より　だいぶ　大きくなつた　やうでした。

けらいたちは　みんな　つゝさきを　そろへて　一どに　うちはなし　ました。もう〳〵と　たちのぼる　けむりの　中から　大きな　くまの　からだが　もんどり　うつて　たほれるのが　みえました。

お城へ　かへつてから　や吉は　たくさんの　ごほうびを　いただきました。そのあとで　とのさまが　や吉に　むかひ

「おまへ　どうして　あの　くまの　穴のことを　しつてゐたか。」

と　たづねました。や吉は　くわしく　四五年前の　できごとを　おはなし　して、

「けもの　と　いふ　やつ　は　わりあひ　りこうな　もので　ございます。」

と　いひました。

それを　きいた　とのさまの　かほは　みる〳〵　うちに　かはりました。

「してみると　その　くま　は　おまへの命の　おんじん　では、ないか。その　おんじんの　ねどころを　をしへて　ほうびの金を　とらうとは　なんといふ　見さげはてた　こんじやうの　やつだ！　これけらいども！　こやつを　ひつとらへて　ろうやへ　ぶちこんで　しまへ！」

とのさまは　ことのほかの　おはらだちでした。

恩しらずの　や吉は　ろうやへ　入れられ　たうとう　その中で　しんで　しまひました。

3　ちゆうぎな犬

＝平假名童話＝

むかし　あるところに　さくべゑ　といふ　かりうど　が　ありました。まいにち　てツぽうを　もつて　山へ　でかけて行き　うさぎ　だの、ねのしゝ　などを　とつて、くらしを　たてゝ　ゐました。

さくべゑ　は「白」といふ名の　犬を　もつてゐました。

「白」は、もとは　たいへんげんきな　りかうな犬だつた　のですが、このごろでは　とし　を　とつた　せいか　だんだん　いきほひが　なくなつて、とき〴〵　えものを　にがしたり　しました。はじめの　うちは　さくべゑも、

「かあいそうに　白も　としを　とつたなア。」

などと　いつて、あたまを　さすつて　やつたりして　ゐました。しかし　あんまり　たび〳〵　やりそこなひを　するので、さくべゑも　しまひには　白が　きらひに　なりました。

「おまへなんか　ついてきたつて、うさぎ一つ、とれないんだから　うちで　おるすゐを　しておいで。」

さくべゑは　まいあさ　でかける　ときに、かういつて　白を　うちへ　おいて　ゆかうとしました。しかし白は、どうしても　きゝいれませんでした。むりに　おいて　ゆかうとすると、

「きやうーん、きやうーん。」

と、いまにも　しにさうな　こゑを　だして　なくので、さくべゑも　しかたなく　つれてゆくのでした。そんなとき　もし　えものでも　にがしたり　すると、さくべゑは　ムカツと　はらを　たてゝ

「それみろ、おまへなんかが　ついて　くるからだ。」

といつて、あたまを　コツンと　たゝいたりしました。すると　白は、いかにも　めんぼくなささうに、しツぽをまたのあひだに　はさみ、あたまを　たれて、スゴスゴとあるいて　ゆくのでした。

二

ある日のこと、さくべゑは　白をつれて　とほい山の方へ　きじを　うちに　でかけました。ところが　その日は　どうしたことか　一日かゝつても　きじは　おろか　ずゞめの子　一ツぴき　とれませんでした。そのうちに　だん〳〵　あたりが　くらくなつて　きたので　しかたなく　おうちの方へ　かへりだしましたが、どこでどう　道を　まちがへたものか、大きな〳〵　もりの中へ　はひつて　しまひました。行つても　行つても　もりは　いよ〳〵　ふかくなるばかり、そのうちに　すつかり　日がくれて　しまつて　足もとも　みえなくなりましたので、しかたなく　そこへ　のじゆく　を　することに　しました。

さくべゑは、どん〳〵と　たきび　を　もやしました。それは　おほかみが　やつてくると　いけないと　おもつたからです。

風のない　しづかな　ばん　でした。たきびの　そばに　こしを　おろして、ぢいツと　もえさかる　火をみつめてゐます、とさくべゑは　だん〳〵　ねむく　なつてきました。

「どうも　ねむくて　たまらない。しかし　こんなところで　ねたら　すぐ　おほかみに　くはれて　しまふだらう。どこか　いゝ　ところは　ないかしら？」

と　おもひながら　あたりを　見まわすと　ちようど　いゝ　あんばいに、一本の　大きな　けやきの木があつて、その木の　ねもと　から　一丈ほどの　たかさの　ところが　三又　になつてゐるのが　見えました。

「うん、あそこへ　あがつて　ねむれば　大じやうぶ　だ。」

さくべゑは　てツぽうを　もつて、木へ　のぼりました。

すると　今まで　たき火の　そばで　何か

「ウー　ウー」と　ひくく　うなつてゐた白が、きうに

「わん！　わん！　わん！」

と、はげしく　ほえだしました。

「どうしたんだ、白！」

さくべゑは　ふしぎに　おもつて、こゑを　かけました。が、白は、なほも　上をむいたまゝ　けたゝましくほえたてます。

「やかましい！　白！　しづかに　しないか！」

さくべゑは　はらを　たてゝ　どなりつけました。しかし　白は、ます〳〵　きちがひのやうに　ほえたてるばかりでした。

さくべゑは、ひるま　から、むしやくしや　してゐるところへ、白に　やかましく　ほえられた　ものですから　カツと　のぼせて　しまつて、

「やかましいッ、白ッ！」

と いふがはやいか、こしに さしてゐた 山刀を ぬいて なげつけました。

ひようしの わるい時には しかたが ないもので、その刀は 白の ふともゝに グサリと つきさゝりました。

白は かなしい さけびごゑ を あげました。しかし なほも ほえるのを やめずに、しまひには さくべゑの かほを ぢいッと みつめながら かなしい かなしい こゑで なきつゞけました。

さくべゑは はじめて「へんだぞ」と おもひました。その とたん、なんとなく くびすじが ぞく〳〵と さむくなつた やうな 氣がしたので、ひよいと うしろを ふりかへつて みました。

と どうでせう、さくべゑの ゐるところから 一けんほど 上に 一ぴきの ドスぐろい 色をした 大蛇が きついて、ぢいッと こちらを にらんで ゐるでは ありませんか。

二つの まなこが、たき火の ほのほに キラ〳〵と かゞやいて ゐるのを 見た時、さくべゑは からだぢうの 血が こほりついて しまふやうな氣が しました。てッぽうを とりなほす どころか、こゑさへたてることが できません。むちうで 木を すべりおりて にげださうと しましたが、もう だめでした。大蛇の からだが するすると ほどけたかと おもふと、たちまち おひついて さくべゑの 足から どうへかけて まきついて ゆきました。さくべゑは くるしみの うめきごゑを たてました。

ちようど そのとき、もゝに いたでを おふた 白が、まりのやうに 大蛇に とびかゝつて、しッぽのあたりに したゝか かみつきました。これには さすがの 大蛇も よわつたと見えて さくべゑの からだを はなし、こんどは 白に むかつて 行きました。

さくべゑは しばらくの あひだ、きぬけしたやうに なつて、白と 大蛇の たゝかひを みてゐましたが

やがて ふと 氣がついて 一もくさんに にげだしました。岩かどに つまづき、いばらに ひきたほされしながらも むちうになつて かけだしました。

三

夜の あけるころ、さくべゑは やつと じぶんの 村まで たどりつきました。きものは ビリ〳〵に さけて かほいろは まるで しんだ人の やうでした。

「さくべゑが 大蛇に あつた。」

といふ うわさは たちまち 村ぢうに ひろまりました。そして みんな 手に〳〵 てッぽうだの まさかりだの かま などを もつて 大蛇たいぢに ゆくことになりました。

もとの けやきの木の ところまで きて見ましたが、大蛇は もとより 白の すがたも 見えませんでした。しかし、草の上に 大蛇の とほつた あとが のこつてゐたので それに ついて 行くと、たうとう大きな ぬまの きし で、大蛇の すがたを 見つけだしました。

ゆうべ あんなに いくぢなく にげだした さくべゑも、けふは 大ゐばりで てッぽうに たまを こめました。そのほか 三人の かりふども みんな つゝさきを そろへて 一どに うちだしました。

そのうちの一二はつが みごとに 大蛇のあたまに あたりました。人々は さけびごゑを あげながら はしりよつて、のたうちまわる 大蛇を ずだ〳〵に 切りさきました。

おなかの あたりを さいた時、一ぴきの 犬の しがいが でて きました。毛の色が すッかり あかくなつて ゐたので

「これは 白では あるまい。」

といふ ものもありましたが、さくべゑは、

「たしかに　白に　ちがひない。」と　いひました。そして　人々にむかつて　白が　じぶんに　大蛇の　ぬるこ
とを　をしへてくれたこと。じぶんが　それとは　しらずに　刀をなげつけたこと。白は　それでも　まだ　じ
ぶんの　ためを　おもつてくれて　じぶんの　みがはりに　しんでくれたことなどを　はなして　きかせました
大つぶの　なみだが　いくすじも　さくべゑの　ほゝを　つたつて　ながれました。
さくべゑは　それいらい　かりふどを　やめて　お百姓に　なりました。今でも　えちぜんの國の　ぬなかに
は、そのうちの　はかばには「シ〻ラの墓」と　かいた　ぼうぐひが、もう　ばんぶん　くされかゝつて　たつてゐ
ると　いふことです。

＝平假名童話＝

第二十七　よい子供

一　學習助成の着眼點

（1）　着眼點　「よい子供」は一ヶ年間學習せし道德軌範の歸結點である。兒童より眺めたるときの道德實踐の目標であり、最高理解である。

自己に對して、家庭人として、社會人として、國家人としての「よい子供」である。

又、夫等の理解、夫等の目標、夫等の實踐によつて、その結果が如何に招來するかの事實をもさらけ出したものである。

之等の要點を明瞭に意識せしめ統一的根源を樹立しなければならぬ。單に整理復習位に終つてはならぬ。

二　聯關資料

卷一　二七　よい子供

卷三　二七　よい日本人

卷四　二七　よい日本人
卷五　二七　よい日本人
卷六　二五・二六・二七　教育に關する勅語

三　學習助成の要綱

（1）太郎の二年になつて一層修養せしこと
（2）太郎の自己に對する道德的生活
（3）太郎の家庭に對する道德的生活
（4）太郎の社會に對する道德的生活
（5）太郎の國家に對する道德的生活
（6）賞狀と父の訓へ

四　學習助成の計畫　凡三時間

第一時（1）（2）
第二時（3）（4）
第三時（5）（6）

五　學習助成の實際

第一時

（1）太郎が二年になつて一層修養せしこと

太郎は、近い內に三年になるのである。二年に進級してからは、一學年に比して特別に勉勵し學校でも家庭でも一度もなまけた事はない。

殊に、修身の教へは、本にある事でも、先生の御教へでも、兩親の御教へでもすつかり呑み込んで、一つとして忘れた事がない。

ばかりでなしに、夫等は一つとして實踐しないものはない。

（2）太郎の修養

1　太郎は自分の事は自分でしたこと。
　イ、太郎が自分の事は自分でした事に就て。
　ロ、自分で自分の事をしてゐたら將來ばどうなるか。
2　太郎が工夫をしたこと。
　イ、太郎が工夫したこと。
　ロ、何事にも工夫の肝要なること。工夫ある生活のみ價値あること。
3　太郎が身體をきれいに、丈夫にしたこと。

イ、太郎が身體に留意したこと。
ロ、身體と精神との關係。

4　太郎の勤勉。
イ、太郎は一度もなまけなかつたこと。
ロ、勉學勤勉の必要。

5　太郎の辛抱强かりしこと。
イ、太郎の辛抱强かりしこと。
ロ、忍耐の必要と方法。

第二時

家庭生活に於ける場合

1　太郎の孝行をなせしこと。
イ、太郎の孝行。
ロ、父母はありがたい方であること。安心して貰える樣努めることを徹底せしめる。

2　太郎の祖先を尊びしこと。
イ、太郎の祖先を尊びしこと。

ロ、孝の心の延長が祖先に對する心持ちであるべきこと。

3　太郎の兄弟仲よくせしこと。
イ、太郎の兄弟仲よくせしこと。
ロ、最も親しきは兄弟なること。愛敬の誠をいたすべきこと。

4　太郎の親類互に親しみしこと。
イ、親類互にしたしむこと。
ロ、常に出入し相互扶助すべきこと。

社會生活に於ける場合

1　太郎の友人に親切であつたこと。
イ、太郎の親切。
ロ、精神的に相愛すべきこと。

2　太郎の約束を守りしこと。
イ、約束の履行。
ロ、約束を守る上の心得について。

3　太郎の恩を忘れなかつたこと。

イ、報恩。

ロ、恩を受けては忘れずに報恩すること。

4　太郎の他人の難儀を救ひしこと。

イ、難儀を救ふ。

ロ、その人を知つてゐると否とに拘らず救ふべきこと。

5　太郎の老人に親切でありしこと。

イ、敬老について。

ロ、老人は昔經營者であつた事を思ひ親切にすべきこと。

6　太郎の過をゆるせしこと。

イ、寛容について。

ロ、過をしない樣注意すること。人の過はゆるすべきこと。

第三時

國家生活に於ける場合

1　太郎の忠義をつくせしこと。

イ、太郎の忠義。

ロ、平時の忠義に注意する。

2　太郎の規則に從ひしこと。

イ、太郎の遵法。

ロ、國家社會の秩序維持の上に尤も遵法の必要なること。

3　太郎の敬神について。

イ、產土神を敬ひ尊びしこと。

ロ、神社の本質と敬神。

(3)　太郎の賞狀と進級

太郎は、かゝるよき子供にして學業にも優れたるを以て、終業式の日、學校で進級證並に賞狀を頂くこととなつた。其の喜は如何ばかりであらう。校長先生から、いろ〳〵と一生懸命に勉强すべき事のお話があつた。歸つてそのお話をすると父母はまた格別にお喜びになられて。

「太郎さんは、平生勉學にも努力し、修身の道も心掛けよく修養したから賞狀を頂く事ができたのである。これから後も益勉めてよき子供となる樣心掛けねばならぬ。」

と言ひ聞かせた。

(4)　教科書思索

第二十七　よい子供

尋二新修身指導案

1　教科書通讀。

2　深究。

イ、よい子供としての家庭に於ける心掛。

ロ、よい子供の社會に於ける心掛。

ハ、よい子供の國家に於ける心掛。

ニ、よい子供の自分に對する心掛。

ホ、よい日本人になる心掛。

尋二新修身指導案

——（尋二終）——

尋二新修身指導案（奥附）

定價金貳圓八拾錢

昭和十年三月一日初版印刷
昭和十年三月五日初版發行

著作者　安部清見

發行者　東京市京橋區入舟町三丁目三番地　藤原惣太郎

印刷者　東京市京橋區入舟町三丁目五番地　芦田數夫

不許複製

檢印

發行所　東京市京橋區入舟町　振替東京一八五一三番　明治圖書株式會社

大賣捌所
東京　林平書店　東京堂　北隆館　東海堂　文林堂　文盛堂
名古屋　川瀬書店
久留米　菊竹金文堂
佐賀　大坪惇信堂
大阪　合資會社　柳原書店
金澤　宇都宮書店

（印刷所・文弘社荻印刷所）

2.26

修身公民 參考書

奈良女子高等師範學校訓導 岩瀨六郎先生著 （菊判） 定價四、五〇

生活修身原論

▲德目修身、教科書修身に對立して叫ぶ生活修身の先驅。
▲新道德觀と生活修身、生活教育の原理と生活修身、德目修身の檢討と生活修身、指導の具体的事例等卓見多し。

東京高等師範學校教授兼主事 佐々木秀一先生著 （菊判） 定價四、五〇

道德教育の諸問題

▲佐々木先生が外遊を機として道德教育の革新を痛感し其の卓見を披瀝せられし熱著。
▲道德教育上の諸問題を批判解決せる斯界最上の名著

東京女高師訓導兼教諭 澁谷義夫先生著 （菊判） 定價五、五〇

現代の修身教育

▲學校教育、社會教育、宗教教育の實際に從事せる人々に、國民的信念を確立し、金剛不壞の道德を樹立せしむる斯界の羅針盤

東京女高師訓導兼教諭 澁谷義夫先生著 （四六判） 定價二、六〇

尋常小學 修身德目教授の系統案

▲作業主義修身教育の高調
▲德目教授の理想的系統案として條理整然、且實踐指導に大なるヒントを與ふ。

東京府豐島師範 附屬小學校編纂 （四六判） 定價三、五〇

修身書の縱の研究

▲道德的生活の徹底的調査の基礎に立つ、道德生活の指導。
▲生活環境による各課目の分類としての縱貫的聯系の密接。
▲各教材の考察補充、材料の豐富、指導要點の精說。

德島女子職業學校長 德島女子職業學校教諭 安部・平澤兩先生著 定價四、二〇

時代の要求する 小學校作法教育案

▲新時代の作法精神を說き、且其の模式を具体的に闡明す。
▲作法教材の排列、並に其指導方法に關しても詳細に說述す、

修身教育の原理と實際
徳島師範學校前訓導 安部清見先生著（四六判）定價三、〇〇

▲眞實の人間性に立脚し、強き信念の下に熱述せる著書。
▲世界平和の促進、道徳生活の振興を熱願し、説話材料の考究等、修身教育の原理と實際とを説く。

修身教育指導原理と樣式
徳島師範學校前訓導 安部清見先生著（四六判）定價三、九〇

▲右書の姉妹篇として、道徳指導各種樣式を評記す。
▲日本精神發揚に基く訓練の實に就き確信ある研究を發表す。

代表國民道德書彙編 上
廣島高等師範學校 西晋一郎・磯野清先生共著 定價一、二〇

▲正確なる史實と深遠なる哲理に基く我が國獨特の道德編にして、藤田東湖、會津正志の名著を最選して適確なる註釋を附し、新日本道德樹立の確證を得たるもの。

私の修身教育
奈良女子高等師範主事 田尻潤逸著（四六判）定價三、九〇

▲修身教授の現狀に慊らず、其の革新を目指して起つ斯界の警鐘。
▲各學年各教材主要點の眞研究に至つては、精細を極む。

公民教育資料大成 上卷
東北帝國大學教授 廣濱嘉雄先生編著（菊判）定價六、八〇

▲著者は嘗て小學教育に從事したる少壯教授として令名高く公民教育の第一人者として、文部省の信頼厚し。

公民教育資料大成 下卷
東北帝國大學教授 廣濱嘉雄先生編著（菊判）定價六、八〇

▲小學實補、中等學校等の公民教材を網羅して詳述す。
▲考證明確、論斷明快、引例豊富、社會の眞相を穿ち人性の機微に觸れ、教育の眞義に立つて熱著せる堂々二千四百頁の大著書。

公民教育と實生活
廣島高等師範學校教授 長倉燾介先生著（菊判）定價三、六〇

▲公民の實生活に付き記述せる點本書の一大特色たり
▲伊勢大廟境内の所感より説き起し、國文に對する感想に至る樣々の事項に及べる點實に完璧中の完璧。

公民教育と修身教育
廣島高等師範訓導 堀之内恒夫先生著（菊判）定價三、五〇

▲公民教育の意義と目的を紀し、教育内容を詳述す。
▲公民と修身教育との聯繫を説き、其の具體的指導を明記す。

公民教育の實際
川崎市田島小學校長 山崎博先生著（四六判）定價二、二〇
小學校に於ける

▲著者が歐米視察に上らんとして卓見を述ぶるもの
▲公民教育説要論、公民教育汎論、公民科教授記錄生活訓練汎論、教育公民的方法等重要問題を檢討す

公民教育と其教授訓練
文部省實業補習教育主事 岡篤郎先生著（四六判）定價三、二〇
新制

▲現代思想公民教育の理論を明記し具體的經驗を述ぶ
▲思想教育青年教育の方針を力説し其徹底を期す
▲堂々五百三十一頁、詳解闡明引例豊富證左確實なり

公民的訓練の指導法
文部省補習教育主事 松本喜一先生著（四六判）定價二、五〇
現代青年

▲各國の實例をあげ、公民訓練の基本と、其の精神を叙す
▲公民教材三十八課を解説し實際生活の指導要諦二十項目を詳述す

新撰公民教科書 上・下
東京文理大研究室 文學士 大杉謹一先生著 定價各〇、三五

▲文部省要目に準據して精選せる最新の教材
▲全篇に漲る日本精神の情熱は以て現代青年の耳目を惹きその心魂を鍛ふに足る

訓練と實踐指導
東京府豊島師範訓導 喜多村・鷲山兩先生共著 定價二、九〇
小學校に於ける

▲新訓練の本質を明かにし、日本精神・協同・自治などの訓練要諦を詳説して餘蘊なし
▲各學年の訓練系統と實踐指導を精叙す

東京女高師訓導 澁谷・市村兩先生著 檢敎

新修身書解説 尋三 小學常
新修身書解説 尋四 小學常
新修身書解説 尋五 小學常
新修身書解説 尋六 小學常

定價各二・五〇

▲本書目は修身教育の本質に立脚し、生活訓練の原理に則りて各學年系統的發展的に教授要議及解説を展開せり
▲殊に兒童生活の實態を凝視し、環境整理に細密なる注意を拂ひ實踐指導に深く留意せるは本書の異彩たり
▲例話の補充的教材を提供して教授上興味と感激を與ふる利便を圖れることも亦本書の特色なり

靜岡縣靜岡師範主事文學士
市村清次郎先生著

高等小學 新修身書解說 高一

高等小學 新修身書解說 高二

高等小學 女生用修身書解說 高一

高等小學 女生用修身書解說 高二

四六判全四冊・定價各二・九〇

▲本書は各科の要旨を明かにし、縱橫共に綿密適切なる連繫を取り且教材の附加敷衍を詳細にす

▲各科に關連して美談逸話を多く揭げ、以て感激の好資料とせるは實際的教育者に取りて頗る好都合なり

▲各科の題材に關し卓越せる著者の道德觀を述べ、各德目內容を明かにせるは又本書の一大特色なり

▲社會的公民的教育を施すことに、細心の注意を拂へることも特筆すべき本書の特色ならん

東京高師教授 亘理章三郎先生著

詔勅の聖訓と道德教育 （菊判）定價五、八〇

▲特に教育に關係深き詔勅の眞義を謹解し、且幾多の活例話を引用して國民道德の大本を嚴示し、以て現代に於ける道德教育の一大指針とせるもの

文部省實業補習教育主事 岡篤郎先生著

公民科新要目解說 讀公民科新要目解說 定價二、六〇 （定價二、八〇）

▲實業教育の權威岡先生が熱誠をこめたる確信ある著

▲公民科新要目の眞精神を把握し教授要諦を闡明し、教材の附加敷衍極めて多し

東京高等師範學校訓導 熊井甚太郎先生著

生活指導の修身教育 （定價二、八〇）

▲生活の本質を見きはめて新時代に於ける修身教育の要訣を說く斯界の金字塔

▲尙童心に卽し全人陶冶を期して指導の眞諦に及ぶ

德島縣師範學校前訓導 德島女子職業學校長
安部清見先生著

尋一 新修身指導案 定價二、八〇

▲修身教育に關し該博なる研讀と、切實なる體驗を持つ著者畢生の力著

尋二 新修身指導案 定價二、八〇

▲學習指導の新機軸として、學習指導の着眼點、聯關資料、學習助成要項、及計畫學習助成實際、學習助成上の注意、參考資料、補充資料等實に完璧無比

尋常小學 修身學習指導案 尋三 定價二、八〇

▲特に兒童生活の凝視による、學習指導の實際に至りては卓識と體驗の非凡を思はす

尋常小學 修身學習指導案 尋四 定價二、八〇

▲尋一、二學年に於ては童心の訓化、學校生活の指導を重視し、これに對する興味深き、童話及實例を多く揭ぐ

尋常小學 修身學習指導案 尋五 定價二、八〇

▲尋三、四學年に於ては全般的なる生活訓練を重んじ自發的共同的生活の基礎を養ふことに努力す

尋常小學 修身學習指導案 尋六 定價二、八〇

▲尋五、六學年に於ては實踐指導は日本精神涵養を主として、情意の陶冶につとむ

高等小學 修正修身學習指導案 高一 定價二、九〇

▲高等科に於ては、道德的判斷力を養ひ、自主的公民生活の基礎を培ふことに主力を注ぐ

高等小學 修正修身學習指導案 高二 定價三、二〇

ㅗ-5H-95

【明治圖書の教育書】

新修身書の指導精神 東京高師訓導 熊井甚太郎先生著 (四六判) 定價二、七〇 尋一

▲尋一兒童の眞生活を凝視し、その德育指導大方針を確立して立論する所正に磐若不同
▲本書は各課とも指導目的・教材考察・兒童考察指導計畫・指導過程・參考資料の六大項目に分ちて詳解精說至らざるなく、新時代に於ける修身教育最高の指導精神たり

新修身書の指導精神 東京高師訓導 熊井甚太郎先生著 (四六判) 定價二、七〇 尋二

新修身書解說 靜岡師範主事 市村清次郎先生著 (四六判) 定價二、六〇 尋常小學 尋一

▲現代生活との機を各課教材に關し現代生活に即して深遠なる題材觀乃至道義觀を精說す
▲指導要項並に指導過程を明にして生活指導の眞諦とその具體化を說く
▲例話並に之に關聯せる事項の解說には懇切叮寧を極め尙補充例話も頗る多し

新修身書解說 靜岡師範主事 市村清次郎先生著 (四六判) 定價二、六〇 尋常小學 尋二

新定修身書精說 奈良女高師訓導 岩瀨六郎先生著 (四六判) 定價二、五〇 尋一

▲生活指導の修身教育を形調せる岩瀨先生が新修身書の編纂趣意を體得せる指導指針
▲各教材の主眼を闡明して之を詳解し、實踐指導と生活訓練の要諦を力說細叙す
▲實踐指導案の綿密にして且つ補充例話の豐富なる亦本書の一大特徵たり

新定修身書精說 奈良女高師訓導 岩瀨六郎先生著 (四六判) 定價二、五〇 尋二

尋一修身指導書 東京府豐島師範訓導 鷲山重雄先生著 (四六判) 定價二、六〇 訓童化心

▲潑溂として純情に匂ふ童心の適切なる訓化育成を念願して熱述細叙せし確信の力著
▲本書は各課の主眼點と教材觀を明示し、指導要項を細叙し、取扱法の實際を詳解して遺憾なし
▲尙實踐誘導の具體案に努力を傾け補充例話の充實に萬全を期す

尋二修身指導書 東京府豐島師範訓導 鷲山重雄先生著 (四六判) 定價二、六〇 訓童化心

終